

図書館の徹底活用術①

「対話」を通じた学びへの着眼
Bakhtinの「言語と文化の記号論」に寄せて 枝元 益祐

皆さんの学習支援の為に図書館の有用な活用方策についての近接領域を毎回紹介をしています。皆さんの学習活動を拡張する拠点である図書館を有効に活用する為の窓口に於けるレファレンスサービスでの「対話」という実践活動や経験を通じた学びに焦点を当てつつ今回は、ブルーナー（Bruner, J.S.）の『可能世界の心理』で展開された「論理・実証モード」と「物語モード」に沿って「対話」について着眼しました。

それを図書館での学びへと繋げる為に更に今回は、バフチン（Bakhtin, M. M.）が展開した「他者性」に着眼したいと思います。

毎回継続して図書館での学びを、共同体での協同関係に基づく関係性から生成する主体的学習とその支援という側面で捉えていますが、今回も同様に、お互いの感情や人間関係、更には対話することや協同的に学習することへの価値や規範といったものも伝達され共有化されていくプロセスを踏襲します。というのは、こういった観点が相互作用しているメンバー間の感情的な結び付き（紐帯関係）を作り上げ、更には対話空間というものを構築していく上での重要な契機になっているからです。

社会的構成主義（social constructivism）では、人間の認識は社会文化の中でその影響を受けながら、直接的には他者との相互作用を通して自らの考えや知識が構成されていくと捉えます。であるから、主体的な学習やそれを支える知識は決して個人の頭の中に孤立した状態で存在するのではなく、その個人が帰属し、参加している『学びの共同体』の中に共有化される形態で成立していると考えられます。

こういった共同体の中での「対話」に着眼したBakhtinはその著書『言語と文化の記号論』（北

岡誠司（訳）新時代社、1980.）で、共同体内に於ける他者との対話こそが、それぞれの構成員（メンバー）が暗黙に持ってしまっている共同体内の内部閉鎖的な規範、パラダイムを壊していく契機になると主張しています。だからこそ、他者との相互作用が重要な位置を占めることになるのです。ここに共同体内の他者性が持っている役割があるということが出来ます。このような他者の存在と役割を端的に表現したのが、「対話性」であり、異質な者との真の対話から生成する創造性を指摘した「内的説得力のある言葉」というものです。

他者と関わるということは、自己を他者に投影し、そこで自己を明らかにすることで改めて自己を意識していくという過程であるということが出来ます。この意味では、ミード（Mead, G. H.）の社会的自我形成と共通する認識がありますが、こういった他者との関係性から生成する学びに着眼することの意味は、そこには人間の認識がどのように成立するのかという重要な捉え方があるからです。

つまり、人間の認識やその意識に基づく言葉は外部にある対象世界でもなく、同時に個人の頭の中でもなく、他者との関係性の中に存在すると考えることが出来ます。ここに於て、その他者と自己とを結びつける「対話」がその関係性構築及び言語に於いて重要な機能を帯びているということが出来ます。

このことを図書館での主体的な学びとその支援という関係性に当て嵌める為に今回は、更にBakhtinの言説に踏み込んで考察を深めたいと思います。

えだもと ますひろ（准教授・図書館学・教育学）